

大河内村真富士山附近の地質

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-08-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 成瀬, 達郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006058

大河内村真富士山附近の地質

成瀬達郎*

1959年度の卒業研究として、昭和34年3月より同年12月まで延べ25日間にわたって静岡県安倍郡大河内村の安倍川左岸附近の地質を調査したので、その概略を報告する。

調査範囲は安倍川を西縁とし、真富士山、龍爪山の山嶺を東境とし、北を黒部沢、南を大沢で限る約20 Km²にわたる地域である。

従来この地域の調査は、小池清氏の論文に基づく地質図、および松本修一氏の「真富士山ルートマップ」が発表されたのみで詳細な調査はなされておらず、ただ漠然と瀬戸川累層群とアルカリ玄武岩で代表される大井川層群とが接しているということがわかっていただけで、この両者の関係は明らかにされていなかった。そこで、これらの層群間の境界位置決定及びその関係をこれに沿う地質並びに地質構造とともにすこしでも解明しようと努めた。

I, 地 形

安倍川に沿って、その東側は海拔1,300 m~1,700 mの平均高度をもつ山陵が八紘嶺、安倍峠、地蔵峠、真富士山第一峰を経て本調査地域に入り真富士山第二峰、龍爪山へと南北に連なっている。西側は赤石山脈の前山である笹山山嶺、勘行峰、大日峠の山嶺の支脈である二王山、見月山が同じく南北に走り、その間を安倍川が南流している。

地形は全般的にみて壮年期の初期の様相を呈し山嶺線頂部には、平坦面の残っているところもある。本調査地域内には、ずい所に河岸段丘がみられ特に高度500 m~700 mにかけて黒部沢のカザマキ肢附近に高位段丘の広い平坦面がみられる。又高度450 mの所にある倭峰部落もこの高位段丘の上に存する。地形的特徴として天神の滝、大滝が断層線崖に生じたものと思われるほか、この南北に走る大河内断層を境に東側が急に険峻となる。

II, 地 質

本調査地域は大井川層群の堆積時、すなわち中新世の初期に海底において噴出したと考えられるアルカリ玄武岩帯(大井川層群)と古第三系の瀬戸川累層群下村層群とに分けられる。両者は地層の一般走向にはほぼ平行に走る大

*教育学部4年生

河内断層によって境されている。

A, 瀬戸川累層群下村層群(工藤周一氏命名)

砂岩層, 頁岩層, 砂岩頁岩互層が主で, 玄武岩質凝灰岩, 石灰岩, 礫岩が数 m の厚さでレンズ状に挟在している。砂岩層は硬質で黒灰色を呈する所が多い。頁岩層はよく剝理が発達し千枚岩化している所もある。一般に黒色であるが, 風化面では, 茶褐色を示し片状に風化分解している。砂岩頁岩互層は各々の厚さが $10\text{ cm} \sim 20\text{ cm}$ で層理がよく発達していて, 概して砂岩優勢の互層が多い。石灰岩は頁岩質石灰岩でかなり硬質である。そして一般走向に沿い南北にレンズ状に介在している。礫岩層の礫の大きさは径 $3\text{ cm} \sim 5\text{ cm}$ 位で(最大 80 cm) 砂岩, 珪岩礫からなり, 厚さは 10 m 位である。本層は $N10^{\circ}E \sim N30^{\circ}E$ の一般走向を有し傾斜は東西共に $70^{\circ} \sim 80^{\circ}$ 位である。微断層が数ヶ所に見られるが特に記載するほどのものはない。

B, 大井川層群

大井川層群の主体をなすものは粗面岩で龍爪山~真富士山第一峰の峰一帯に分布している。粗面岩の外見は風化され茶褐色を呈するが, 細長い白い長石の斑晶が目立つ。また気孔をもつ部分があり大体トムソン沸石によって満たされている。この粗面岩の間に黒色の頁岩が成層してはさまれている。粗面玄武岩は緑色を呈し一見凝灰岩に類似している。鉱物は主として長石と輝石からなり, アルカリ長石は石基中の隙間を填めている。本調査地域北部においてみられる玄武岩は北に細長く延びている。この玄武岩は粗面岩質玄武岩である。

C, 段丘礫層

黒部沢の高位段丘礫層

瀬戸川累層群の砂岩頁岩互層の凸凹面の上に粗面玄武岩礫の散在する $5 \sim 6\text{ m}$ 位の厚さの凝灰質の粘土がのり, その上に 10 m 位の厚さの礫層が来る。礫は緑色を呈する粗面玄武岩が大部分である。礫層が西に傾斜しているので扇状地状の堆積物の名残りであろうと思われる。

低位段丘礫層

蕨野の部落が低位段丘の上に存する。この礫層は径 $2 \sim 3\text{ cm}$ の小さな礫の層と径 $20 \sim 30\text{ cm}$ の大きな礫の層とが互層している。礫の種類は現在の安

倍川河原の礫と変わらない。現河床面から比高10~20mである。

III, 地 質 構 造

本調査地域の瀬戸川累層群は、激しい変動を受け、等斜褶曲をなしている。走向は一般に西南部では東北東、東北部では南北にちかづき、西北へ急に傾斜するのが普通である。このように外帯山地特有な構造上の性格が明らかにあらわれている。大井川層群の東境は南北に連なる静岡構造線によって静岡層群と逆断層で接するとされている。西境はN10°~20°W, 60°~80°Wの逆断層で瀬戸川累層群下村層群と接している。この西境の逆断層(大河内断層)は四箇所の沢において確認された。いずれも破碎帯3m~5mの巾をもち、瀬戸川累層群の頁岩はかなり変化を受け千枚岩化している。

IV, 対 比

本調査地域の瀬戸川累層群及び大井川層群とも対比に役立つような化石は発見できない。岩相、層序及び構造上から瀬戸川累層群下村層群を天徳寺層群に対比したい。天徳寺層群の堆積は静岡市美和足久保でのLima,sspなど大長村上相賀でのウニなどの化石から古第三紀漸新世と考えられている。

本調査地域のアルカリ火成岩帯は新第三紀中新世初期大井川層群が堆積する当時海底で火山として噴出したものと考えられる。しかもこの火成岩の間に所々に大井川層に類似した堆積岩が挟まれている。このようなことからこのアルカリ火成岩帯を大井川層群に属するものとして取扱った。この大井川層に対比されるのは、森町から金谷町までの間に大体西北西の走向で幅狭い帯状区域を占めている倉真層群と富士川流域の西八代層群である。

V, 結 論

1. 本調査地域は西半分は瀬戸川累層群、東半部に大井川層群が分布する。
2. 瀬戸川累層群は主として砂岩、頁岩からなる。大井川層群は粗面岩、粗面玄武岩、玄武岩からなる。両者とも南北性の走向を示す。
3. 瀬戸川累層群と大井川層群との関係は逆断層である。
4. 本調査地域の瀬戸川累層群下村層群を瀬戸川累層群天徳寺層群に、大井川層群を西八代層群に対比する。

最後に、調査研究にあたって終始御指導下さった鮫島輝彦助教授、竹内正

辰助教授に厚く御礼申し上げる次第である。

主 要 文 献

1. 大塚弥之助：糸魚川～静岡地質構造線に就いて(地質VOL48, P19)
2. 小池 清：南関東の地質構造発達史(地球科学34号)
3. 千谷好之助：地質図幅静岡(1/75,000)同説明書
4. 横山次郎：日本地方地質誌中部地方(朝倉書店 1950)
5. 松本修一：真富士山ルートマップより(地学しずはた1号)
6. 望月勝海外：静岡県の地質及び地質図1/200,000
7. 山崎直樹：駿河国西部に於ける火成岩の化学成分に就て
(小川博士還歴記念地学論叢P437, 1930)
8. 工藤周一：静岡県安倍郡大河内村中部の地質(予報)(地学しずはた第20号, P17)

大河内村真富士山附近の地質図

